

# ぽつぽのお手帳

鈴木三重吉

青空文庫



すゞ子のぽつぽは、二人とも小さなく赤いお手帳をもつてゐます。この二人は、「黒」<sup>くろ</sup>よりもにやア〜よりも、「君」<sup>きみ</sup>よりも、だれよりも一ばん早くから、すゞ子のおあひてをしてゐるのです。

一ばんはじめ、或冬<sup>ある</sup>の、氷のはつてゐる寒い日に、二だいの大きな荷馬車がお荷物をつんで、ぽつぽたちのながく住んでゐた村から、町の方へ、ことく出ていきました。ぽつぽは、あのまゝかごにはいつて、その二ばんめの荷馬車の、一ばんうしろに乗せ

られてゐました。二人は、一たいどこへいくのだらうと言ふやうに、しきりにきよとくくびをうごかしてゐました。お父さまはそのときぼつぽに言ひました。

「二人ともおとなしくして乗つてお出で。こんどは海の見えるお家へいくんですよ。」と言ひました。

「そして、そのお家へ、小ちやなすゞちゃんが生れて来るのですよ。」と、小石川こいしかはのお祖母ばあちやまがそつと二人におつしやいました。ぼつぽは、

「お祖母さま、お祖母さま、そのすゞちゃんといふのはだれでございます。」と聞きました。

お母さまは、だまつて、たゞかるくわらひながら、みんなと一

しよに車に乗りました。

ぽつぽは、それからこんどのお家うちへつきました。そのじぶんには、すゞ子の曾祖母ばあばあは、まだ玉木たまきの大叔母おばあちゃんのところいらつしやいました。あき子あきこ叔母をばちゃんもまだ来てゐませんでした。おうちには、千代ちよといふ小さな女中がゐりました。

ぽつぽは、せんとおなじやうに、お部屋のそとの、ガラス戸のところにおかれました。このお家うちは、おもてからはいつて来ると、たゞの平家でしたけれど、上へ上つて、がらす戸のところへいつて見ると、そのお部屋のま下が広いおだいどころで、そこからはお部屋はちようど二階のやうになつて、つき出てゐました。

そのお部屋のちき目のまへは砂地でした。そして、そのすぐさ

きが海でした。ぽつぽはガラス戸の中から、どんよりした青黒い海を、びつくりして見てみました。まつ正面の、ずっと向うむかの方には、小さな赤い浮標うきがかすかに見えてみました。

その向うを、黄色いマストをした、黒い蒸汽船が、長い烟けむりをはいて、横向きにとほつていきました。二人のぽつぽは、

「おやく、あんな大きな船が来た。お、早いく。ぽつぽウ、ぽつぽウ。」とおほさわぎをしました。

お母さまはこのお部屋へおこたをこしらへて、小さなすゞちやんが生まれてくるのをまつてみました。そして千代と二人ですゞちやんの赤いおべゝをぬひました。

暗い冬はそれからまだながくつゞきました。昼のうちは、おも

てのじくじくした往来を、お馬や荷車やいろくろの人がとほりま  
した。それから、お向ひのうどんやで、機械をまはすのが、ごと  
くごとくと聞えました。

しかし夜になると、あたりはすつかり穴の中のやうにひつそり  
となつて、たゞ、海がびたくくと鳴るよりほかには、何の音も聞  
えませんでした。

暗い海の中には、星のやうなあかりがたつた一つ、ちかりく  
と消えたりとぼつたりしました。それは、昼に赤く見えてゐた、  
あの浮標うきの上にとぼるあかりでした。

ぽつぽは、そんな晩には、さびしさうに、夜でも、

「ぽッぽウ、ぽッぽウ。」となきながら、

「すぐ子ちゃんはまだおうまれにならないのですか。いつでせう、いつでせう。」と聞きました。

## 二

そのうちに、だん／＼と五月が来ました。海の空もはれ／＼とまつ青さをに光つて来ました。

お母さまは、ネルの着ものに、青いこうもりをさして、千代ちよをつれて、そこいらへ買ひものにいきなぞしました。

往來には、もういつの間にか、つばめが、海の向うから来て、

すい〜とかけちがつてゐました。電信の針金にもどつさりとまつてゐました。

お父さまは、すぐちやんはいつ生れるのでせうねと、よく、小石川のお祖母ばあちやまとも話し〜しました。

お家のちかくうちには、高井たかゐさんのおばあさまといふ、それは〜よいおばあちやまがいらつしやいました。そのおばあちやまが、とき／＼おみやをもつていらしつて、小石川のお祖母ちやまとお二人で、早くすぐちやんが生まれるやうに、いのつて下さいました。

すると、六月の或晩あるでした。お母さまには、あすはすぐちやんが生れるといふことがわかりました。お父さまも、それはよろこ

んで、すぐに小石川のお祖母ちやまに来ていたゞきました。

でも、ぼっぽにだけは、みんなだまつてゐました。ぼっぽがよろこんで、あんまりおほさわぎをするとうるさいから、あとでそつと見せてやることにしたのでした。

その晩お母さまは、すゞちやんの寝る小さな赤いおふとんをちやんとしいて、そのそばへやすみました。

お父さまがあくる朝日をさまして見ますと、ちやんとすゞちやんが生まれてゐました。まつ赤かなお顔をした、小さい赤ん坊のすゞちやんは、一人で赤いおふとんの中に、すやくとねてゐました。お父さまは、よろこんで、

「お祖母さま、小さなすゞちやんが生れて来ましたよ。」と言つ

てよびました。お祖母ちやまは、かけていらしつて、

「あら〜かはいゝすゞちやんね。」と言つて、それは〜およろこびになりました。すゞちやんはそれからしばらくたつて、はじめてお母さまにお乳をもらひました。

すゞちやんは、とき／＼「おぎア〜」と泣きました。それから、「おふんにやい〜」と言ふやうにも泣きました。

ぽつぽは、はじめてすゞちやんの泣き声を聞くと、

「あれはだれでせう。ぽッぽウ、ぽッぽウ。」と、しきりにお父さまに聞きました。お父さまは、

「あれはすゞちやんだよ。こんど生れた赤ちやんだよ。」と言ひました。すると、ぽつぽは、よろこんで、

「おやさうですか。」と、ぱたくおほさわぎをしました。そして、

「早く見せて下さい。早くく。」と二人でねだりました。

しかし、すぐちゃんは、まだたうぶんは、そつとねかせておかなければならないので、ぼつぽのところへつれていくわけにはいきませんでした。

ぼつぽは、まいにちく、

「どうぞすぐちやんを見せて下さい。早く見せて下さい。」と言つて、かはる／＼ねだりました。それで或日<sup>ある</sup>お父さまは、すぐ子をそつと、おふとんにくるんで、ぼつぽのかごのまへにつれていきました。そして、

「すゞちゃんく、ごらんなさい。これがおまいのぽつぽだよ。」  
と言ひました。ぽつぽは、

「すゞ子ちゃんくこんちは。」

「すゞ子ちゃんあたし私もこんちは。」と、それはくおほよろこびで  
かう言ひました。

でも、まだ小ぢやなすゞちゃんは、まぶしさうに目をつぶつて、  
おぎア〜といふきりで、ぽつぽを見ようともしませんでした。  
すゞちゃんは、たとへそのとき目をあけても、まだ、ぽつぽどこ  
ろか、お父さまもお母さまも、なんにも見えなかつたのでした。  
だれでも小さなときは、目があつても見えないし、お手があつて  
も、かたくちぢめて、ひっこめてゐるだけです。ちようど、足が

あつても、大きくなるまではあるけないのとおんなじです。

そのうちに、だん／＼と暑い八月が来ました。海はぎら／＼と、ブリキを張つたやうにまぶしく光つて来ました。すゞちやんは、昼でも、小さなおかやの中にねてゐました。

お母さまは、お部屋の鏡だんすのふちから、ねてゐるすゞちやんの目のま<sup>め</sup>上へ横に麻糸をわたして、こちらの柱のくぎへく／＼りつけました。そして、赤いちりめんのひもの両はしに、小さな銀の鈴をつけて、それをその糸へつるしました。

すゞちやんは、目<sup>め</sup>がさめて、かやをどけてもらふと、黒い、きれいな目<sup>め</sup>をあけて、その赤いひもをぢいつと見てゐました。お母さまはとき／＼立つて、そのひもをこちらの方へ少しひいて見

ました。

さうすると、すゞちゃんの黒い目は、めんめすぐに、はすかひにこちらの方を見ました。こんどは向うへやると、すゞちゃんはまた黒目をうごかして、そちらの方を見ました。鈴はひもがうごくたんびにりんくとなりました。お母さまは、

「まあ、ちゃんと見えるのですね。」と言つて、うれしさうに笑ひました。お父さまは、こちらのいすにかけて見てゐました。お部屋の三方には、まつ白な、うすいカーテンがかゝつてゐました。その中に、すゞちゃんの着てゐる赤いおべと、つるした赤いひもとが、きわだつてまつ赤に見えました。

三

お父さまは、それからまた或日、<sup>ある</sup>すゞちゃんを、ぼつぽのまへへだいていきました。ぼつぽはよろこんで、

「すゞ子ちゃん、すゞ子ちゃん、こんちは。ぽッぽウ、ぽッぽウ。」と言つて、おじぎをしました。

お父さまは、

「こつちよく、すゞちゃん。こつちをござらんさい。」と言ひながら、すゞちゃんをかごのまへにすゑるやうにして、ぼつぽを見せようと思いました。しかし、すゞちゃんは、片手をかためし

やぶりながら、ちがつた方を向いたきり、いくらをしへても、ちつともぽつぽを見ようとはしませんでした。ぽつぽは、

「まあ、まだくお小さいんですね。いつになったら、すゞちゃんか、ぽつぽやおつしやるでせうね。」と、さも、まちどほしさうにかう言ひました。お母さまは、

「ほんとにいつのことでせうね。」と言ひながら、お乳の時間が来たので、すゞ子をおひぎにとりました。

「なに、ぢきですよ。今にすゞちゃんが一人で、ぽつぽのところへ来るやうになりますよ。」

ちようどいらしつてみたお祖母<sup>ばあ</sup>さまは、かうおつしやりながら、お乳をいたゞいてゐるすゞちゃんの、黒い髪の毛をおなでになり

ました。

「あゝ、ぼつぽに、いゝものを上げてよ。」と、お母さまは、ふと思ひ出したやうに、帯の間から、小さな赤いお手帳を出してぼつぽにわたしました。

お父さまとお母さまとは、いつもすゞちやんが早く大きくなつてくれることばかりまつてゐました。ぼつぽも、そのことばかり言つてまつてゐました。

その十一月に、ぼつぽは、また、すゞちやんや、みんなと一よに、ちがつた町の方へ遠く引っこしました。それは、ちか／＼に玉木たまぎの大叔母おばあちやんが、はる／＼ばあ曾祖母おばあをつれて、すゞちやんを見に来て下さるからでした。そして、あき子叔母をばちやんも

お家うちの人になるので、すゞちやんの生れたお家うちではせまくてこまるからでした。

すゞちやんは、とき／＼あき子叔母ちやんのおひぎにだかれて、ぽつぽのかごのところへいききました。ぽつぽはこちらのお家うちでもまたガラス戸の中へおかれてゐました。すゞちやんは、ぽつぽのかごのわきに立つちをさせてもらふと、ちようどお口がふちのところへ来ました。すると、すゞちやんはいつの間にか、ちゅつくと、ふちをしやぶつてゐました。それから、お手てにもつてゐるがらくをふりました。

「まア、すゞちやんは、先せんから見ると、ずるぶんおほきくおなりになりましたね。」

ぼつぽはかう言つて、叔母ちやんとお話をしました。

それからまた寒い冬が来しました。その冬があけると、すゞちやんはそろ／＼はひ／＼をし出しました。それからまた青い八月がまはつて来しました。すゞちやんは、歩いてはたふれ、歩いてはたふれして、よち／＼ともう十足とあしばかりあるけるやうになつてゐました。そのときには、すゞちやんを見たい／＼と言つておほさわぎをしてゐられた曾祖母ばあばあも、もうこちらへ来ていらつしやいました。

或日、すゞちやんは、よち／＼とおすだれのそとへかけて出ました。あき子叔母ちやんは、

「あら、あぶない。」と言ひながら、あわてゝおつかけていきま

した。すゞちゃんはまだ少しでたふれるところを、ばたりと、ぽつぽのかごにつかまりました。

「すゞ子ちゃん、こんちは、ぽッぽウ、ぽッぽウ。」と、ぽつぽがおじぎをしながら二人でかう言ひました。するとすゞちゃんはかごにつかまつたまゝ、そのまねをして、

「ぽッぽウ、ぽッぽウ。」と言ひくおじぎをしました。あき子叔母ちゃんは、それを聞いて、

「おや、今のはすゞちゃんですうか。」と、ふしぎさうな顔をして、ぽつぽに聞きました。ぽつぽはにこ〜笑ひながら、

「えゝ、おしまひのはすゞ子ちゃんですよ。まアおじやうずですこと。さあ、もう一ど言つてごらんさい。ぽッぽウ、ぽッぽウ

。「と、言ひました。すゞちやんはまたまねをして、

「ぽッぽウ、ぽッぽウ。」と、おじぎをしました。あき子叔母ちやんはびつくりして、

「あら、まあ、ほゝゝ。ちよいと、すゞちやんがぽッぽウ、ぽッぽウつて言ひましたよ。」と、思はずおほきな声でお母さまをよびました。すゞちやんはその声にびつくりして、

「わア。」と泣き出しました。

これは、すゞちやんが口を利いた一ばんのはじまりです。お父さまやお母さまはそれを聞いておほよろこびをしました。ぽつぽもそれはよろこんで、来る人ごとにその同じお話をしました。

すゞちやん、あの二人のぽつぽは、こんなときからのぽつぽで

すよ。

お母さまは、もう先せんのお家うちのときに、すぐちやんの生れてから今日までのことで、二人のぽつぽのしらないことは、すっかり話して聞かせました。ぽつぽは、それをみんな、お母さまにいたゞいた小さな赤いお手帳へつけておきました。二人が見てしつてゐることは、もとよりすつかりかきつけてゐます。

ですから、すぐちやんは、大きくなつて、ごじぶんの小さなときのことかわからないときには、いつでも、ぽつぽのお手帳を見せとおもらひなさい。

にやア〜や、黒くろが来たのは、ぽつぽにくらべればずっと後のことです。にやア〜は、すぐちやんが、やつとはひ〜するこ

ろに、或をぢちやんがもつて来て下さつたのでした。黒は、たつたこなひだ、お家の犬うちになつたばかりで、もとは、そこいらののら犬だつたのです。そのつぎに、一ばんおしまひに、君きみがおもりに来たのです。

# 青空文庫情報

底本：「日本児童文学大系 第一〇巻」ほるぷ出版

1978（昭和53）年11月30日初刷発行

底本の親本：「鈴木三重吉童話全集 第五巻」文泉堂書店

1975（昭和50）年9月

初出：「赤い鳥」赤い鳥社

1918（大正7）年7月

入力…tatsuki

校正…伊藤時也

2006年7月19日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# ぽつぽのお手帳

鈴木三重吉

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>